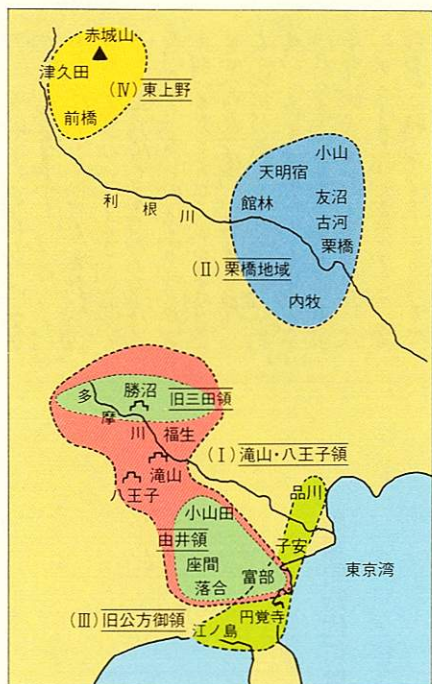


18

北条氏の滅亡と中世の終焉

■関東の情勢

一五八二年（天正十）織田信長の攻勢の前に甲斐の武田氏が滅亡した。その信長もその年、京都の本能寺で明智光秀によって殺害された。この一連の事件によって関東の政治情勢も大きく変わっていった。北条氏は積極的な領土拡大を指向し、やがて信濃、甲斐の二か国をめぐって徳川氏と対峙するようになったが、のちに講和が成立し、北条氏は徳川氏と同盟関係を結んだ。以後北条氏は、北関東の下野の宇都宮国綱、常陸の佐竹義重ら反北条氏勢力とのあいだで戦闘を繰り返すこととなった。



小田原北条領国における氏照の支配領域略図 氏照の発給文書は図Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの地域に集中して出されている。当該地域における氏照の役割は、小田原北条家当主から全権委任されて、新征服地の戦後処理を行い、強硬な小田原北条領国化を進めることであった。

本能寺の変の知らせをうけた豊臣秀吉は、山崎の戦いで明智光秀を討ち、織田家臣団のなかで主導的地位を得た。さらに一五八三年（天正十一）には賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破り、織田信長の後継者としての地位を確立した。このような情勢のなかで、秀吉と徳川家康の対立がしだいに表面化し、ついに一五八四年（天正十二）、両者は小牧・長久手の戦いに及ぶこととなった。しかし両者は和睦を結び、



八王子城御主殿曳き橋(復元) 御主殿と城山川を挟んだ
対岸を結ぶ復元された曳き橋。

一五八六年(天正十四)家康の上洛が実現し、秀吉に服属することとなった。家康は秀吉の関東政策の先鋒をになうこととなったが、このことは北条氏の対豊臣政策の転換をうながすことになったのであった。

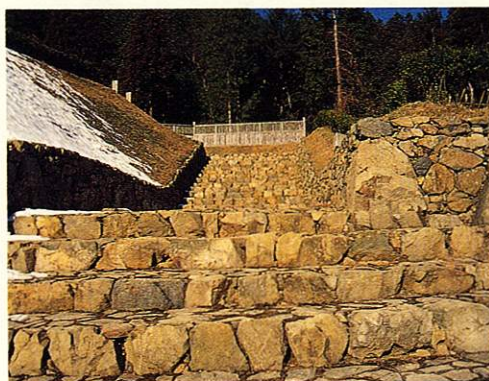
■北条氏照の八王子城築城

それ以前の一五六九年(永祿十二)、甲斐の武田氏は碓氷峠^{うすいとうげ}を越えて上野から武蔵に入り、南下して滝山城と江戸城を攻撃し、滝山城は落城の危機に瀕した。北条氏照が新城の築城を思い立った背景には、この武田氏の滝山城の攻撃があったと思われる。

八王子城は、氏照なりに武田氏への対策を検討し、さらに武田氏を越えて畿内政権(織田信長、豊臣秀吉)をも視野においた城郭として、また彼自身の政庁にふさわしい城郭として築城された。築城の時期については諸説があるが、一五八一年(天正九)には城としての機能を十分に有し、完成していたと考えられている。

■秀吉による戦争禁止の命令

徳川家康を従えた秀吉は、家康に関東政策を担当させた。一五八六年(天正十四)家康が北条氏政にあてた書状に「関東惣無事の儀につき」という言葉がある。「惣無事の儀」というのは、秀吉が戦国大名間の戦争を禁止した政策をいい、この時期秀吉は、領土を確定する権利をもつのは自分だとして位置づけていたのである。これに違反した領主は豊臣軍の征伐をうけた。書状にこの言葉があるということは、秀吉が関東での北条氏と諸大名との戦闘を私戦とみなし、これを停止させる命令を出していたということである。



御主殿から虎口入り口をのぞむ。御主殿へは曳き橋から通路、階段を経て虎口に至る。外側斜面には擁壁となる石垣が取り巻いている。

北条氏は秀吉に対し危機感をもつようになった。とくに一五八七年（天正十五）秀吉が九州平定に成功し、関東への圧力が強まるようになると、その年の七月晦日付けで百姓大量動員体制確立のための人改令^{ひとあらためらい}が出された。郷中に居住する者は侍、農民にかかわらず、危機に際して参陣できる者を申告せよというものであった。

■八王子城の攻防

秀吉は統一事業を着々と推進し、一五八八年（天正十六）四月、新築し聚楽第^{じゅうらくだい}に後陽成天皇を招き、諸大名を集めて秀吉への服従を誓わせる起請文^{おこしごうぶん}をとり、政権固めを行ったが、北条氏からはだれも上洛しなかった。その後、北条氏は四か月を経過してようやく氏政の弟氏規を上洛させた。この上洛の遅れは、北条氏内部の意見統一がかなりむずかしかった。この上洛の遅れは、当主の氏直や氏規が家康のとりなしに期待を寄せて上洛を主張したのに対し、氏政や氏照らは対豊臣強硬論を展開したのである。

氏規の上洛は、北条氏が惣無事令を受け入れたことを意味し、事実上秀吉の傘下に組み込まれることになった。しかし氏照はこのころ、自分の八王子領内に次々と臨戦体制のための軍備増強制策を推し進めていた。一五八七年（天正十五）十二月には家臣たちの八王子城下への集合を命じ、妻子の八王子城入城を義務づけ、翌八八年初頭にかけて、八王子領内には次々と積極的な臨戦体制が整えられていったのである。秀吉も八九年十一月、北条氏に宣戦を布告し、諸大名に小田原への出陣を命じた。

一五九〇年（天正十八）三月未明、豊臣方の前田利家、上杉景勝の軍による八王子城攻撃が開始さ



発掘された八王子城跡の古道 八王子城跡の環境整備を目的とした発掘調査は昭和62年から八王子市教育委員会によって実施されている。大手門(薬医門)付近で確認された古道。



八王子城陥落時に討ち死にした者たち(あきる野市大悲願寺過去帳〔過去霊簿〕) 1590年(天正18)6月22日、わずか一日で落城した八王子城では、討ち死にした将兵の数は500余人と記されている。



北条氏照の墓(八王子市元八王子 宗関寺) 1590年(天正18)7月11日、小田原城下で切腹して果てた氏照の墓所は、宗関寺と小田原の2か所にある。

れた。このとき城主氏照は小田原城に籠城しており、八王子城には氏照の重臣大石照基、近藤綱秀、横地吉信、狩野宗円、中山勘解由らと、多摩地域の土豪、地侍らが防衛にあたっていた。また将兵にまじって多くの女房、子どもたちが籠城していた。

七月五日、北条氏は全面降伏し、早雲以来五代一〇〇年にわたって関東に覇を唱えた北条氏は滅亡した。秀吉は北条氏の全領地を没収したうえに、主戦派と目された氏政、氏照ら兄弟を切腹させ、当主氏直は高野山へ追放した。そして七月十三日、秀吉は、関東の新領主として、五か国を領有していた家康を武蔵・相模ほか六か国に移封することとした。北条氏の旧臣たちや土豪・地侍たちは、ある者は家康やその家臣に仕え、ある者は農民となつて土着した。